

「平成30年度 授業アンケート（記述形式）」の結果報告

鳥田直哉*

はじめに

本稿では、筆者が平成30年度秋学期に行った講義科目「教育課程論〔中・高・養・栄〕」「教育法」「教育史」を対象に、「平成30年度 授業アンケート（記述形式）」（以下、「本アンケート」とする）の結果を報告する。

大学教育の改善が求められる中、授業アンケート、あるいは授業評価に関しては、これまでに多くの研究が積み重ねられてきた。米国においては、学生による授業評価が1920年代から行われており、また、本来「形成的な評価のための道具」であったものが、「教員の評価にも使われるようになった」という歴史がある¹⁾。我が国においても、数十年前から授業評価について関心が高まり、特に、学士課程等におけるFDの義務化以降、授業評価に関する研究が進められた。近年の研究をみると、授業規模や授業属性、あるいは評定期間が評価に影響を与えることを指摘する結果もある²⁾。

一方で、学生による授業評価の意義や、その信頼性について疑念を抱く論調もみられる。例えば、宇佐美寛『大学授業の病理—FD批判—』では、「〈学生による授業評価〉の概念分析」の中で、「非教育的」³⁾であるなどとして、痛烈に批判している。また、佐藤手織らの「授業評価に影響を与える要因—特に『信頼性』をめぐる考え方について—」⁴⁾では、それまでの授業評価に関する研究をレビューしている。同論文によると、教員の年齢、学生の出席率や学力など、「授業をより魅力あるものにするために」という目的にはおよそ無関係の要因が評価に影響していることが分かる。多くの先行研究を踏まえた上で、「授業評価をめぐって、さまざまな問題点が指摘されている」こと、「授業評価者としての学生（学習者）の適格性自体に疑義が提示される問題状況もある」⁵⁾ことを指摘している。とはいえ、授業評価がその授業の在り方を、全く映し出していないとも言えまい。

本アンケートは、本学全学教育委員会が、平成30年10月12日～同10月26日の期間で実施したものである。所要時間は5～10分であり、「回収率が高まるよう、授業開始時または授業中にアンケートを実施」⁶⁾するよう指示があった。

本アンケートの内容は、大きく分けて、5段階評価部分と、記述部分で構成されている。

5段階評価部分は、「各設問について、次の5段階のいずれかに○をつけてください。」として、以下の5つの内容について尋ねた。まず、予習・復習・課題に費やした時間について、「あなたは、1回の授業につき、『予習・復習・課題』を平均どのくらいしていますか。」と尋ね、「⑤2時間以上」「④1時間半」「③1時間」「②30分以下」「①全くしていない」の5段階で評価させた。次に、「シラバスにもとづいて授業が行われていますか。」「教員の説明はわかりやすいですか。」「私語など授業を妨げる行為に対して、適切な対応がありますか。」「授業の開始・終了時間はきちんと守られていますか。」という各問について、「⑤強くそう思う」「④そう思う」「③どちらともいえない」「②そう思わない」「①全くそう思わない」の5段階で評価させた。

記述部分は、「この授業で良いと思うこと」、「この授業で改善して欲しいと思うこと」について回答させた。

* 東海学園大学教育学部

なお、本アンケートの実施期間について、先に述べた通り、平成30年10月12日（金）から同年10月26日（金）で実施するよう指定があった。「教育法」については5回目、10月12日（金）1時限、「教育史」についても同じく5回目、10月17日（水）2時限、「教育課程論」については6回目、10月23日（火）5時限に実施した。すべて授業開始時に実施した。

1. 授業概要

各科目のカリキュラム上の位置づけや授業概要について述べる。

「教育課程論〔中・高・養・栄〕」は、教育学部における「専門科目群」中、「教育方法の分野」に位置づけられている選択科目である（2年次開講・2単位）⁷⁾。また、中学校・高等学校教諭一種免許状（英語・保健）、養護教諭一種免許状の取得にあたっては必修となっており、「教育課程及び指導法に関する科目」に位置付いている。なお、人文学部人文学科、健康栄養学部管理栄養学科においては、「免許・資格関連科目群」として位置づけられる自由科目である。中学校・高等学校教諭一種免許状、栄養教諭一種免許状の取得にあたって必修となっている。受講者数は、教育学部が103名、人文学部が13名、健康栄養学部が9名の、計125名であった。本授業では、教育課程の意義や、編成の基準、学習指導要領の性格や改訂の経緯、新学習指導要領の基本方針と要点などについて、概説することなどを目的としている⁸⁾。講義を中心として授業を進め、適宜、ビデオ、OHC、スライドなどの視聴覚教材を提示した。授業計画には、各週に予習・復習・課題を記述している。授業前には、「次回授業内容についてあらかじめ図書館等で基礎的事項を把握し、講義ノート等に記録しておくこと」とし、また、授業後には、「講義ノート、配付資料、板書および口頭説明を反芻し、自らの考察等を記録しておくこと」を課した。

「教育史」は、教育学部における「専門科目群」中、「教育基礎の分野」に位置づけられている選択科目である（3年次開講・2単位）。教員免許状の取得にあたって必修ではないが、「コースモデルとして履修すること」をすすめている。受講者数は、教育学部の61名であった。「教育史」の授業では、「現状を見渡す『水平』な分析と同時に、それがいかにして起こったのか、歴史に学び『垂直』に教育事象を捉えること」、「現在の教育における諸問題に対して課題意識をもち、それらがどのような経緯の上に成り立っているのかを探求するため、教育史の基礎的な学習を行う」こと、「歴史を通して、現在の教育問題がどこからどのように生じてきたのか、重要なヒントを得」ることをねらった。日本および西洋の教育通史を古代から現代に至るまで幅広く押さえた。「教育課程論〔中・高・養・栄〕」と同じく、講義形式を中心にして授業を進め、必要に応じてOHC、スライドなどの視聴覚教材を提示した。また、各週の予習・復習・課題についても、「教育課程論〔中・高・養・栄〕」と同様であるが、「教育史」の授業においては、その週に教授した内容に関連する練習問題を課した。各自ノートを用意させ、練習問題の解答および解説を記述させ、次週の講義開始前に点検を行った。

「教育法」は、「教育史」同様、教育学部における「専門科目群」中、「教育基礎の分野」に位置づけられている選択科目である（3年次開講・2単位）。同じく、教員免許状の取得にあたって必修ではないが、「コースモデルとして履修すること」をすすめている。受講者数は、教育学部の38名であった。本授業では、「様々な法令によって規定されている」現代学校教育の現状を鑑み、法による公教育の統制が、「教育によって社会的な発展が期待されていることの現れ」であるとともに、「すべての子どもに教育を保障するために不可欠なものである」ことを理解させることを目的としている。しかし一方で、教育が、「本質的に人間の内面（人格形成、成長発達）に関わる営みであるため、自由な雰囲気のもと子どもと教師の人間的な関わり合いの中で行われること」も、教育法の学修を通して、その重要性を習得することもねらっている。「教育課程論〔中・高・養・栄〕」「教育史」と同じく、講義を主体として、ビデオ、OHC、スライドなどの視聴覚教材を提示し、各回の授業における「予習・復習」を課した。

2. 5段階評価部分の結果

【図表1】に、各科目の受講者数、本アンケートの回収数、回収率を示した。「教育史」「教育法」については、本アンケート実施期間中に実習等があり、欠席者数が多く、回収率が低かった⁹⁾。

【図表1】 受講者数および回収数・回収率

科目名	開講年次	単位数	回収数	受講者数	回収率
教育課程論	2	2	115	125	92.0%
教育史	3	2	30	61	49.2%
教育法	3	2	14	38	36.8%
計			159	224	71.0%

5段階評価部分についての結果は【図表2】の通りである。先に述べた5段階評価について、「⑤2時間以上」・「⑤強くそう思う」を5、「④1時間半」・「④そう思う」を4、「③1時間」・「③どちらともいえない」を3、「②30分以下」・「②そう思わない」を2、「①全くしていない」・「①全くそう思わない」を1として、その平均値を示した。

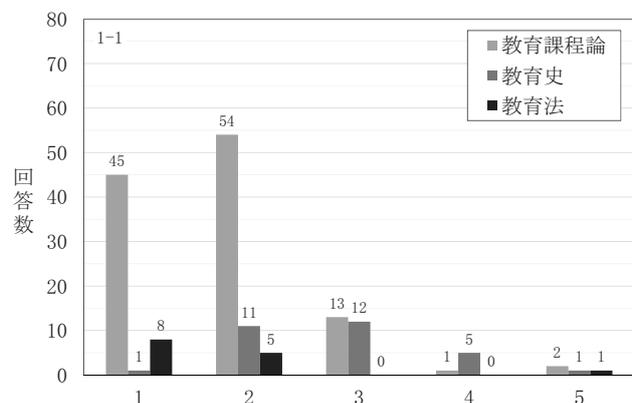
【図表2】 5段階評価の結果

科目名	予習・復習・課題	シラバス	説明	私語など	開始終了時間
教育課程論	1.791	3.922	4.174	4.009	4.226
教育史	2.800	3.933	4.233	4.167	4.300
教育法	1.643	3.929	4.143	4.143	4.357
全体	1.969	3.925	4.182	4.050	4.252

まず、予習・復習・課題に費やした時間についてであるが、平均値は「教育法」が最も低く約1.6、「教育史」が約2.8と最も高かった。先に述べた通り、「教育史」の授業においては、毎回、その日に講義した内容に関する練習問題を与え、ノートに解答・解説を作成させて、次週の授業においてノート点検を行った。この項目に関する記述部分をみると、「予習：復習（解説）・宿題があって良い」「毎回課題があるため、復習や予習ができやすくて良い」「毎週の課題」「ノートチェックをしっかりとる所」が良いとの内容が、若干ではあるがみられた。このような取り組みが他の科目よりも高い数値になってあらわれたものと考えられる。なお、値の分布については、【図表3】の通りである。「30分以下」「全くしていない」が大半を占めており、大幅な改善を要するところである。

次に、シラバス通りに授業が行われていたか否かについてである。平均値はいずれの科目においても、およそ3.9であり、おおむね授業計画通りに授業が進められたと認識しているものと考えられる。同じく、その分布について、【図表4】に示した。

説明のわかりやすさについては、5項目のうち、全体で二番目に高かった項目である。いずれの科目においても、4.0を上回っており、授業内容についての理解度は高いものと思われる。後にも述べるが、記述部分の記述内容



【図表3】「予習・復習・課題」分布

には、以下のような回答がみられた。

授業プリントが分かりやすい／解説が分かりやすい／穴埋めだからポイントが分かりやすい／スライドで分かりやすくまとめられている。／プリントが穴うめで分かりやすい／大切なところを教えてくれるからわかりやすい／パワポを使っているので見えやすく良いと思います。／わかりやすい 内容が面白い／プリント形式で分かりやすい／分かりやすく丁寧。／具体的な説明があってわかりやすいです。／新聞なども取り入れられていてわかりやすいです。／プリントや映像を使いながら分かり易い説明で講義を行っている点。／丁寧／重要な部分が色付けされていたりしてわかりやすい。／先生の説明がやさしく、わかりやすいです。／プリントを配布したり、新聞記事や、DVD を使っているので、説明を理解しやすい。

これらの記述をみると、配布物等の教材やその提示の方法が分かりやすさにつながっているものと考えられる。なお、この分布は、【図表 5】である。

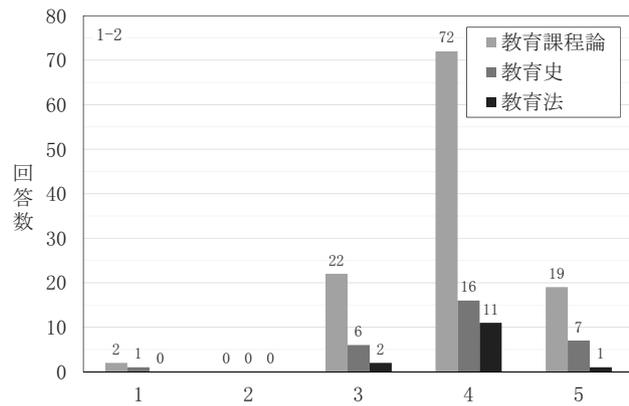
私語などへの対応についても、4.0 を上回っており、適切な対応がなされたと捉えられていることが分かる。分布は【図表 6】の通りである。

最後に、授業開始・終了時刻についてであるが、いずれの科目においても、この値が最も高かった。分布は【図表 7】の通りである。

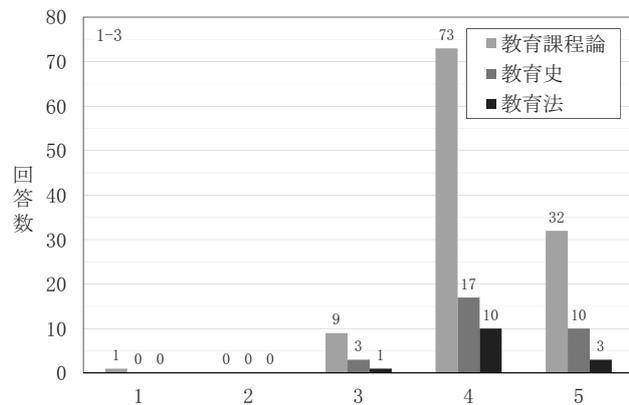
3. 記述部分の内容

(1) 「良いと思うこと」

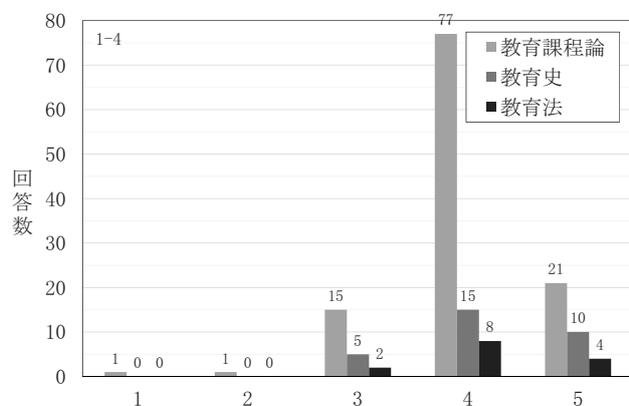
続いて、記述部分についての検討を行う。先ほど述べた理解のしやすさ以外のことについて、記述内容を示す。ただし、【図表 8】の通り、記述部分について積極的に記述するよう促したものの、回答率が芳しくなかった。必ず記入するよう指示すべきであった。



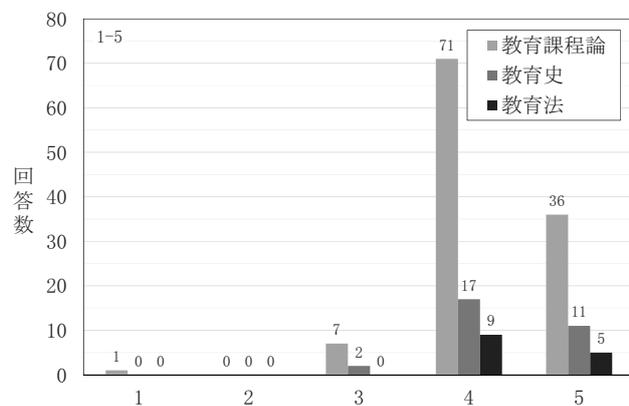
【図表 4】「シラバス」 分布



【図表 5】「説明」 分布



【図表 6】「私語」 分布



【図表 7】「開始終了時刻」 分布

【図表8】記述部分の回答率

科目名	「良かったこと」			「改善して欲しいこと」		
	記述あり	記述なし	計	記述あり	記述なし	計
教育課程論	41 (35.7%)	74 (64.3%)	115 (100.0%)	24 (20.9%)	91 (79.1%)	115 (100.0%)
教育史	20 (66.7%)	10 (33.3%)	30 (100.0%)	10 (33.3%)	20 (66.7%)	30 (100.0%)
教育法	12 (85.7%)	2 (14.3%)	14 (100.0%)	3 (21.4%)	11 (78.6%)	14 (100.0%)

まず、各科目において、可能な限り、授業終盤に新聞記事を紹介したことについてである。良いと思うこととして、「関連する新聞記事を用いること」「新聞記事を毎回あるのは、よい」「新聞なども取り入れられていてわかりやすいです」「教育関連の新聞記事があり現在の流れを知れる」「今の教育における課程や、教育のあり方が学べる。新聞記事に触れるのがすごく良いと思う」などの記述がみられた。

教材作成の工夫、提示の方法についても、学修の能率に役立ったようである。3科目とも、ノート代わりに空欄を設けたプリントを配布し、そのプリントをスクリーンにも示し、空欄に入る語句を記入させた。また、そのプリントの余白に「かきこむスペースがある」ことが好評だったようだ。空欄を設けたプリントについては、「自分で空欄をうめていく」ことで学びの足跡を目視できる、「プリントが穴ぬきになっていて授業後でも勉強に使いやすい」、「自分で勉強したことを振り返る」ことができるなど、復習等に効果的であったようである。ただ、後にも述べるが、スクリーンを通して提示することについては、座席の位置によって見づらい場合が多いようであった。

そのほか、「パワーポイントを使った説明によってスムーズに授業が進んでいく」「授業のペースがちょうど良い」「授業の流れがとてもいい」「丁寧に授業を進めてくれること」「前回の授業の振り返りがある」など、授業の進行に関する記述がみられた。

授業内容については、「教育史」に限らず、「教育課程論〔中・高・養・栄〕」においても、我が国の教育の歴史に重点を置いたことから、「教育採用試験のうちの教育の歴史を押さえることができる」「教育の歴史、日本の今までの歩みを知ることができる」などの記述があった。

(2) 「改善して欲しいと思うこと」

「改善して欲しいと思うこと」の記述は、全体で37件の記述があったが、そのうち、28件は「特にはないです」「ない」「なし」などであった。その他、9件について、うち5件は「スライドが見えづらい」「スクリーンを用いるのは少し見えづらい時がある」「スクリーンの文字が小さいときがある」など教材提示に関することであった。学生の座席位置からどのように見えるのか配慮をする必要があった。

先にも述べた通り、「教育史」の授業では、ほぼ毎回、練習問題を課したので、「宿題難しい」との声があった。また、授業者が反省すべき点として、「たんちょう」との記述が1件あった。確かに、教授内容の伝達に力点を置きすぎ、減り張りを軽視していたかも知れない。その他、試験の形式についての情報提示、室内の温度調節についての要望が1件ずつみられた。

以上から、今後、受講者の立場に立った教材提示の方法、授業展開を工夫する必要性を感じた。

おわりに

本アンケートの分析から見えたいくつかの課題について、以下の三点を指摘しておく。

第一に、予習・復習・課題に費やした時間がきわめて短いことである。シラバス上では、各回の授業

に対する事前の準備や、事後の反芻について明記したが、「全くしていない」との回答が、3科目全体で3割以上を占めていた。「教育史」については、授業の都度、具体的に指示を出し、ノートの特検を行ったため、「1時間」と回答した者が最多であったが、それでも受講者全体の半分ほどである。シラバスに明記したのみでは不十分であることを確認できた。

第二に、説明のわかりやすさである。この項目については、おおむね「強く思う」「思う」との回答が得られ、3科目全体で合わせて9割を超えた。ただ、この結果をそのまま肯定的に捉えてよいものだろうか。抽象的な理論を咀嚼することを通して得られる力、「理解できない、わからない」ものを「わかろうと努力」¹⁰⁾ させることも必要であろう。

第三に、本アンケートの肝である、記述部分の回答の少なさである。授業のたびに行われるアンケートに辟易しているのか、記述することに意味を見出せないのか、様々な理由が考えられるが、不明である。「良かったこと」の回答率が「改善して欲しいこと」のそれを上回っていることをみると、授業者を目の前にして記述することに抵抗を感じていることも考えられる。学生が積極的に記述するためには、まずは教員がその回答に対して真摯にコメントするなどの時間をじゅうぶんに確保することが必要だろうか。

註

- 1) 山崎博敏「アメリカの州立大学における教育評価—大学・州・全国レベルでの機構—」広島大学高等教育研究開発センター編『大学論集』32号、2001年、133頁参照。
- 2) 西山茂「『学生による授業評価』結果の統計的分析による考察」（『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』第1号、2018年、33-45頁）、同「『学生による授業評価』結果の授業属性ごとの統計的分析による考察」（『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』第2号、2019年、128-140頁）では、「履修生数（アンケート回答者数）」が多くなるほど評価点の平均値が低下すること、「授業属性」、例えば「言語の授業」では「ネイティブスピーカーによる少人数でコミュニケーションを重視する授業が多く、この授業では教師と学生の心理的な距離が近い」ことから高評価であるなど、授業の種類が関係することを指摘している。また、中田英利子「評定期が学生による授業評価に与える影響」（『日本教育工学会論文誌』42巻 Suppl.号、2018年、177-180頁）は、シラバス通りに授業が進行したか否かに関する学生による評価の方法は、時間の経過によって変化することを指摘している。
- 3) 宇佐美寛『大学授業の病理—FD批判—』東信堂、2004年、114頁。
- 4) 佐藤手織・松浦勉・小林繁吉・渡辺武秀・笹原徹「授業評価に影響を与える要因—特に『信頼性』をめぐる考え方について—」（『八戸工業大学異分野融合科学研究所紀要』第8巻、2010年、61-78頁）。
- 5) 前掲、佐藤手織ほか「授業評価に影響を与える要因」、70頁。
- 6) 東海学園大学・全学教育委員会「『授業に関するアンケート（記述式）』実施マニュアル」、2018年。
- 7) 東海学園大学編「2017 履修のてびき 教育学部 教育学科」、2017年、27-36頁参照。以下、カリキュラム上の位置づけについては、同書を参照した。
- 8) 平成30年度秋学期シラバス「教育課程論〔中・高・養・栄〕」<https://unipaap2.tokaigakuen-u.ac.jp/up/faces/up/km/Kms00802A.jsp>：令和元年9月15日閲覧。以下、「教育史」「教育法」の授業概要等についても、同シラバスによった。
- 9) 教育学部教育学科養護教諭専攻の3年生では「養護実習」、2・3年生では「臨床実習」が実施された。本アンケートは、授業開始時に行ったため、実施日が、「本日が初めて」の受講日であった学生、「実習でまだうけてません。」という学生にとって回答はできなかったものと思われる。これら、5段

階評価部分などが無回答の学生8名分については集計から除外した。

- 10) 前掲、宇佐美寛『大学授業の病理—FD 批判—』、129頁。これについて、同書では、以下のように述べられている。

私が大学生だった頃、(ある大学の質問紙の項目に有る)「講義は全体として、理解しやすいものでしたか。」などということに気にする意識は全く無かった。理解できない、わからないとしたら学生の方が悪いと思っていた。自分の方が悪い、自分の責任だと思うから、わかろうと努力する、授業で足りないところ、わからないところは自分で本を読む……教育としては、この方が健全である。(同頁)